

山河破れては人も国も無し

— 大旱魃の黄河流域を行く —

富山県農村医学研究会 大浦 栄次

1995年7月1日から8日間、黄河文明の発祥の地、中国河南省を訪れた。以前から中国と共同調査を続けている河南省の先生方との農業中毒・農業災害事故等の調査打合せ及び農村視察のためである。

河南省は人口8,800万人。中国の交通は鉄道が大動脈。その鉄道が南の広州から北の北京

ら堤防の幅は11km、水の流れる川幅は3km。ところが、この黄河に水がない。あっちこちに中州ができ、土が露出している。黄河観光でホバークラフトに乗船した人達の話によると、水が少なく、まるで泥沼の上を走っているようだったと言う。2年前の同じ7月、同じ位置から見た黄河には、海と見間違ふような水が遙かかなたまでとうとうと流れ、波打っていた。

95年、中国は揚子江流域及び東北部は大洪水。一方、黄河流域は大旱魃である。

洛陽から西へ列車で六時間半で西安に着く。この間、車窓には渴き切った風景がつづく。厚さ数十から百数十mの黄土が堆積する黄土高原を行く。西安は、かつて唐の時代に長安



へ南北に、上海から西の果てウルムチまで東西に、それぞれ中国大陸を一直線に縦横断する。この東西南北の鉄道が交差する位置に河南省の省都鄭州がある。河南省は古来「中原」と呼ばれ、「中原を制する者は、中国を制する」と言われ、洛陽や開封等7つの王朝が都を置いたところでもある。

黄河に水がない！

農村に向かう途中、黄河を渡った。堤防か



と呼ばれていた古都である。年間平均降水量600mm。元々雨が少ない。ところが、今年は半年で僅か50mm。建国以来の大旱魃である。

西安の市街では、すでに給水制限が始まっていた。我われの泊まったホテルは全日空系のホテル。何とか優先的にタンクローリーで水が供給されていると言う。

水を求めて行きかうドラム缶

翌朝、市内を散歩する。街の歩道を幾人もの人が大きな箒で掃き清めている。が、雨に見はなされた道路は、一掃きごとにもうもう



'93年7月の黄河（上）と同じ場所から撮った今年のもの（下）。水が少なく中州ができている。



荒涼たる黄河高原。今年はまだ数十mmしか雨が降っていない。

たる埃が舞い上がる。

消火栓から僅かにしたたる水で布を湿らせ身体を拭う人。公共の水道の蛇口に群がる人びと。

訪れた農家の庭先に、ドラム缶を3つもくりつけたトラクターがあった。生活用水や畑の水を求め、毎日10往復、3キロ先の何とか水が流れ出ている山際まで行くと言う。また、べつの家には荷車にドラム缶1個がくりつけてある。ロバに引かせて1日2往復、生活用水確保のために水を汲みに出かける。

道路にはドラム缶を乗せたトラックやトレーラー、トラクター等が土埃を巻き上げて行きかう。未経験の大旱魃。頭上に燃えたぎる太陽が人びとを大地に押しつける。その中の人びとは水を求めて黙々と往来する。

ポンプで井戸水を汲み上げている人がいた。30年前に掘った深さ20mの井戸。普段、水位は10m位あり、多い時は地上から7mぐらいまで水位が上がる。ところが、今年は15mまで低下し、ブドウ畑に20分も水を汲み上げると枯渇する。かつて、こんなに水位が下がったことはなかったと言う。

ところで、今から21年前の1974年も大旱魃であった。訪れた農家からほんの数キロ先のところで、水を求めて人民公社の人達が井戸



3キロ先の山際に水をくみに行く農民。台車は各々異なるもので、1日に10往復もする。

を掘っていた。掘れども掘れども水は出ず。代わりに人の顔をした「俑」が発見された。これまでも陶器の人形等は時どき発掘されており、当初邪魔な物が出てきたと言った程度で考えられていた。ところが、これが世紀の大発見だった。中国を最初に統一した秦の始皇帝の時代の8,000体にも及ぶ軍団、「兵馬俑」の発見の端緒であった。

今年の大旱魃、再び世紀の大発見につながる井戸がまた掘られるのだろうか。いずれにしても、当分、雨は降りそうにもない。

中国の主要穀物、トウモロコシの作付を諦めたところがあっちこっちに点在する。

振幅の大きい、食糧生産

94年、タイへ行った。そのタイでもその年は40年ぶりの大旱魃。その前の年も25年ぶり、さらにその前の年も大旱魃と、輸出主力のコメの乾期作が出来ないでいた。

その頃、日本のマスコミは朝から晩まで「タイに行けば安い米がある。安い米がある。安い米がどれだけでもある」とお経のように繰返していた。

協同組合経営研究所常務理事の山本博先生によると、タイでは、さらに93年から97年までの5年計画で15万ヘクタールの水田で乾期稲作を中止させる生産制限が実行されている。

さらに、中部タイの最も生産性の高い稲作

地帯の農地が次つぎと工業開発により改廃されている。その面積は、93年までの11年間に52万ヘクタールで、かつての中部平原の21%にも及ぶ。さらに残された水田面積の20%に当たる40万ヘクタールが耕作放棄されている。

2年前、中国広州を訪れた時にお願ひした運転手さんの生まれ育った所を案内してもらった。行ってみると工場用地がずっと続いており、運転手さんも「1年前は、はるかかなたまで、水田だったのに」と驚いていた。中国の工業開発もすさまじい勢いで進んでいる。

50数年前、大本営発表「勝った！勝った！また勝った！」をマスコミは流し続けた。今、また、マスコミは現地取材もせずに、大本営発表のように「自由化により、もっと安い輸入食品をどんどんいれる」を繰返す。が、ちょっと歩くだけで、世界の食糧供給基地が極めて不安定であることが分かる。

米輸入、稲作放棄。緑豊かな山河破れては、人も国も育ちはしない。

注射される果実

楊貴妃の食した桃

西安は、三千年の歴史をもつ古都である。中でも唐代には100万の人口を越え、世界最大の国際都市であった。その西安の北東30キロに、三千年前の周の時代より現在に至る温泉地、華清池がある。

春寒くして浴を賜う 華清池
温泉の水滑かにして凝脂を洗う

唐の玄宗皇帝の寵愛を一身に受けた楊貴妃。その湯あみの様子をうたった白楽天。その浴場も残されている。

この華清池の門前は、多くの土産物屋さんや近郷近在でとれた農産物を売っている人達でごったがえしている。

楊貴妃も食べたと思われる美味しそうな桃を売っている人がいた。一つ買おうとしたところ、同行の通訳さんに小声で「ダメ、ダメ」と袖を引っ張られた。訳もわからずそこを離れる。

「ここで売っている桃には食紅を注射し、赤い色に見せかけているものがあるのです」と注意された。

桃売りの人の側を離れ、改めて距離を置いて望遠レンズでその桃を眺めまわしたが、不信な点はない。うかない気持ちで再び車に乗る。と、走り出した車の窓から見える別の桃

売り。その籠の桃、その表面全体にマンダラに赤いポツポツがはっきり見える。これは通訳さんの言う通り、赤い色を注射されているらしい。楊貴妃がこれを見たら、玄宗皇帝に何と言ったことだろう。

腐らないスイカ

94年4月稲作事情視察でタイへ行った。タイは前半の半年が雨のほとんど降らない乾期、後半が雨期である。4月は日中40度を超える乾期の真っただ中である。この時期、街頭には沢山のスイカがあちこちで売られている。水分の補給のためであろう、三々五々、日陰でスイカにかぶりつく人達が見られる。

スイカ畑に出会った。案内役で現地に10年住んでおられる田中鴻志さんが、車を止めスイカを求める。「気をつけないといけないんです。市場で売る時に、色が薄いと赤い色を注射するんです。もちろん、自分達の食べるものにはけっしてしませんが」。同行の一同、皆ビックリ。が、実は私の方は二度目のビックリだった。



華清池の前でモモを売る人。なかには食紅をモモに注射する人も（中国1995）



麦ワラを山盛りに積んだトラクターの行列。

数年前、中国のハルビン医科大学の元学長、于維漢先生が我が家に泊まれた。その時、「中国ではスイカに赤い色を注射するだけじゃなくて、腐らないようにストレプトマイシンを注射する者もいるのです。実際に中国で摘発された事が、国家の新聞に載っています」との言葉を思い出したからだ。

このように発展途上の国の人びとの衛生意識はまだまだの感を拭えない。その国々で生産された農産物が「安い」だけを名目に今、大量に輸入されている。

誰ぞ知る盤中の餐 粒粒皆辛苦なるを 麦藁の紙

7月の河南省を走る。この時期、収穫後の麦藁をあふれ落ちんばかりに乗せたトラクターやトレーラーが道路せましと走っている。みな、製紙工場に向かっている。自国にある資源で紙の原料を賄おうとしているのである。

「中国の紙質は悪い」と言う人がいる。しかし、日本の紙の原料の半分以上を輸入に頼り、世界のパルプ材の41%を輸入する。木を砕いたチップに至っては世界の八割を買い占

めている。「お金」の力で世界の緑を剥ぎ取り、木材パルプを使用して「日本の紙質は非常によい」と言うのである。

中国では、用途に応じて紙は食物繊維、木材繊維と分けている。麦藁も貴重な繊維資源である。この麦藁は肥料や飼料としても多様に使われる。

「沈黙の森」

「森の国」と言われていたタイ。1950年代、東北タイの森林面積は六割を越えていた。が、ベトナム戦争時、ゲリラの温床となる等の理由で森林を切り払い入植政策が進められ、今は14%に激減。この東北タイで今、日本の製紙会社等の肝煎でユーカリ植林が進んでいる。

ユーカリは、成長が早く5年で成木となりパルプ材になる。しかし、植林されているユーカリの葉や樹皮には除草剤にもなる成分や、根の成長を阻害する成分が含まれ、他の動植物の成長を阻害する。ユーカリ植林地は虫も鳥も鳴かない、下草も生えない“沈黙の森”であり、もとの生態系を殺傷する凶器の森で



向う側、日本のODA予算ですすめられているユーカリ植林（タイ1994）

ある。

実際、タイのユーカリ植林地には下草がほとんど生えていなかった。さらに、ユーカリは土壌養分を吸いつくす。そのため、2回も植えると土は死に絶える。「緑化」を名目に植えられるユーカリは、10年後にはこの土地が確実に死ぬことを意味する墓標である。このユーカリ植林、日本のODAの予算により、今、世界で展開されている。

マングローブ林を食べてつ移動するエビの養殖池

タイの沿岸部に、エビの養殖池が展開している。日本は世界で貿易されるエビの3匹に1匹を食べている。世界で最もエビの消費量の多い国である。そしてそのエビの多くをタイなどの東南アジアから輸入している。輸出する国々では沿岸部に自生するマングローブを伐採し、養殖池を次々と造成してきた。マングローブは天然の豊かな魚付林であり、真



ヘドロの沈積池と化したエビの養殖池（タイ1994）

水と海水が混ざりあう場所でもあり、多様な魚や生物が豊富に生息する豊かな漁場であった。

1961年、タイにはマングローブ林が35万ヘクタールあった。それが1989年には18万ヘクタールまでに激減した。フィリピンやマレーシアでも状況は同じである。そのため、従来そこで魚を獲って生活していた漁師の漁獲量が極端に少なくなってきた。マレーシアでは沿岸漁民の水揚げが一日30ドルから5ドルになってしまった。

94年、このタイの養殖池を見た。もっと収量を効率よく上げようと、密飼し、エサをやり過ぎたためにヘドロが発生しダメになる養殖池が広がり始めていた。今、これらの養殖池は放棄され、さらに労働力の安いカンボジアやベトナム、さらには中国へと養殖池が移動しつつある。その後には、過去の豊かなマングローブ林の跡形もない無惨な養殖池の残骸が横たわる。

「命は大切」の心は輸入できない

親戚の山の水田。若者は都会生活。田の世話をする労働力がない。1枚、また1枚と水田を放棄してきた。

「この田を開く時、大変だった。それに、

水を確保するにも山を荒らさないように木を植えたり、間伐してきたのだけど……」

昨年田植を諦めた最後の1枚にもすでに灌木が侵入している。

自国の農業や自然を荒廃させつつ、お金の力で世界の食糧や資源を買い漁る日本。しかし、それらは、全て命であり、これを生み出す人びとの汗と涙がある。

禾を鋤いて日午に当たる
汗はしたたる木下の土
誰ぞ知る盤中の餐
粒粒皆辛苦なるを

(李信)

(稲の雑草とりをしていると太陽は真上にのぼり
／汗が稲の根もとの土にしたたり落ちる／誰が知っ
ていよう食卓の食物が／1粒1粒がみな大変な苦
労のたまものであることを)

農林漁業は命を育てる産業であり、その命を生み育てる行為により、単に安心安全の食糧を得るだけでなく「命は大切だよ」との心を育ててきた。

「命は大切」との心は決して輸入することはできない。